

**令和7年度 第3回地方独立行政法人京都市産業技術研究所
評価委員会 会議録**

日 時：令和8年1月29日（木）午後1時30分～午後2時30分
場 所：京都市産業技術研究所 2階 ホールA・B
議 題：第4期中期計画（案）について

議事要旨：

- ・以下、各委員の質問・意見など（○：委員、●：京都市、◎：産業技術研究所 と表記）

【1 開 会】

- ・草木 京都市産業観光局長からの挨拶

【2 議 題】

(1) 第4期中期計画（案）について

～事務局から評価の流れについて説明～

～京都市から資料1に基づき中期計画の位置づけと中期目標による管理と評価の仕組みについて説明～

～京都市産業技術研究所から資料2に基づき計画案について説明～

- ： 第3期中期計画に比べて、第4期中期計画の数値目標がどれも高く設定されており、前向きで良いと思う。産業技術研究所は公的な機関であるため、既存の利用者だけでなく、新規利用者を含め、より多くの方に利用してもらうことが重要であり、新規利用者数の数値目標についてはコミュニティなどを活用し、さらに上を目指していただきたい。また、研修受講も含めた新規利用者数の増加を図るために、補助金の活用や企業の教育研究費・試験研究費等を増やすと税額控除が受けられる制度があり、それらの活用を広報することも有効ではないか。

財務内容については、京都市からの運営費の削減があった際も困らないように自己収入の増額や、経費削減の努力は継続して行っていただきたい。

- ◎： 新規利用者数の増加や自己収入の確保については、第4期も取り組んでまいりたい。また、研究開発についてはこれまでから助成金等を獲得・活用しており、こうした取組をPRするとともに、引き続き促進してまいりたい。

- ： 第3期中期計画に比べ第4期中期計画は数値目標がどれも高く設定されており、チャレンジングであると思うが、人的リソースの補強などは考えているのか。

「利用者アンケートによる目的達成度・利用者満足度」を新たな指標として掲げるなど、量だけでなく質を評価する指標も取り入れようとされているが、コアバリューである共同研究においても件数だけでなく質を評価するような指標を設定してはどうか。

計画の文中に生成AIについての記載があるが、情報セキュリティの問題に対するガイドラインについての方針はあるか。

- ◎： 職員採用については、令和7年10月に研究職を1名募集し、採用を決定している。現在も3つの分野で採用活動を実施しており、優秀な人材確保に努めている。今後については財政状況等も勘案して計画的に採用していく。

生成AIについては、令和7年10月に産業技術研究所として、情報セキュリティの確保やファクトチェックの実施等の内容を定めたガイドラインを策定した。地域企業の皆様に本ガイドラインの情報を還元するなどにより、地域企業の業務効率化の支援にも繋げてまいりたい。

- ◎： 生成AIの活用についての補足であるが、産業技術研究所では導入する生成AIを制限し、情報が外部に漏れないような仕組みを定めている。また、昨年度に産総研からリリースされたデータ解析アプリの勉強会を開催し、データ解析方法や事例紹介などを行い、より効果的なAI活用に向けた取組なども進めている。

研究開発については、失敗を恐れずチャレンジすることが大切だと考えており、新たに共同研究等への申請件数、つまりチャレンジ件数をモニタリングすることとしている。また、簡易受託研究から、本格的な共同研究に繋げることで、地域企業の研究開発を支えていきたいと考えている。

- ： 定量的な指標だけでなく、定性的な指標もしっかり盛り込まれている。また、失敗を恐れずにやってみようという姿勢から素晴らしい技術が生まれると思うので、チャレンジ件数の指標については、京都の産業や技術を伸ばすためにも良い。民間や大学を巻き込んでこうしたチャレンジができることが産業技術研究所の特徴だと思うので、是非進めていただきたい。

「分析・計測プラットフォーム」について、京都には強みを持った分析・計測機器メーカーが多数ある。分析・計測技術は、あらゆる産業のベースとなるものであり、それらのデータを活かして企業の技術を磨くこと

が、京都の産業全体の底上げに繋がると思う。

中期計画の数値目標を4で割って、各年度計画の数値目標とするだけでなく、数値目標を達成したことで更に上の数値目標を掲げるなど、試行錯誤して達成計画を立てるようなことも検討されてはどうか。

◎： 「分析・計測プラットフォーム」については、地域企業の複雑な技術課題にも対応していけるよう、京都域内の大学や分析・計測機器メーカーと連携して、ハード・ソフト両面で分析機器の高度化を図ってまいりたい。

「各指標については、中期計画期間中であっても、取組の進捗状況を踏まえ上方修正等を検討する。資料3：2ページ」と記載しており、各年度の計画策定時に、指標の修正等を検討していく。

◎： 利用者からは、AIシステムの活用に係るご相談も多くいただいております、講習会の開催など、人材育成についてもしっかりと実施していく。

○： ものづくり企業では、AIやDXについて、生産管理や受発注管理での活用はされているが、商品開発や生産技術にはあまり活用されていない。生産技術の現場でデータ収集や選別にエンジニアが多く時間を費やしており、ここを効率化できれば生産性が飛躍的に上がるはず。業務効率化を進め、技術者がやるべきことに時間を使えるようになると、企業の生産性が向上すると思うので、産業技術研究所には、そういったコンサルティングのような支援をしていただけるとありがたい。

◎： AIやDXの活用は重要と考えており、例えば、西陣織の製造工程にAIの画像診断を取り入れ、製造途中の異常検知を可能にする研究開発をしており、伝統産業における人手不足や生産性の向上に繋げる取り組みをしている。

◎： また、実験回数を減らすためのシミュレーション活用も進めているが、シミュレーション結果を検証する「実験」と「高度な分析」も不可欠である。そうしたAIやシミュレーターも活用できる人材をどう育成していくかが課題であり、取り組んでまいりたい。

○： 産業技術研究所には、そのような先進技術のグッドプラクティスをいち早く中小企業に展開していただくことを期待する。

「分析・計測プラットフォーム」を進めるにあたり、組織同士の意思疎通を図るための場作りが重要であると考えているが、具体的なビジョンがあればご説明いただきたい。

また、産技研ユーザーズコミュニティには、京都企業など700者以上が加入されている、非常に大きく貴重なコミュニティだと思う。京都の産業発展のために、産業界だけでなく、横に繋がるような広がりがあれば良いのではないか。

◎： 「分析・計測プラットフォーム」については計画段階ではあるが、それぞれの機関が保有している機器や人的リソースを相互補完しながら、新たな分析・計測技術の開発や人材育成を進めてまいりたい。

産技研ユーザーズコミュニティの活性化については、これまでの“ネットワーク作り”から“共創の基盤”となるようにアップデートしていく。産業技術研究所だけでなく、会員には金融機関や商社などもおられるため、技術的な支援だけでなく、マーケティング支援、金融・資金の係る支援などについても、会員同士で課題に取り組めるようなコミュニティを作ってまいりたい。